

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	大路の柳・ 堤の柳
Sub Title	
Author	川村, 晃生(Kawamura, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1997
Jtitle	三田國文 No.26 (1997. 9) ,p.1- 7
JaLC DOI	10.14991/002.19970900-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19970900-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19970900-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 大路の柳・堤の柳

川村 晃生

古来柳は、古典文学の春景を形造つて、多くの作品に彩りを添えてきた。早く『万葉集』において、

春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしそ思ふ

(巻十一、二四五三)

と、「春柳」という春気を強く感じさせる語が歌語として成立を見ており、また、

梅の花咲きたる園の青柳を縵にしつつ遊び暮らさな

(巻五、八二五)

と、梅とともに春を代表する景物として親しまれてもいた。さらには

霜枯れの冬の柳は見る人の縵にすべく萌えにけるかも

(巻十、一八四六)

浅緑そめかけたりと見るまでに春の柳は萌えにけるかも

(巻十、一八四七)

などを初めとして、結句を「萌えにけるかも」と詠みおさめる柳の歌が存するのにも、古代の人々が柳の芽ぶきに春のあふれる生命力を感じたからに相違あるまい。

しかし柳がそうした早春の景観を形成したのは、いわば副次

的な産物であった。柳は本来それとは別の目的をもって植栽されてきたのである。たとえば柳が街路樹としての用を果したのは、古代文学のいくつかの断片から知られるところである。阿部猛氏『万葉びとの生活』、東京堂出版、一九九五）は、平城京の条坊に柳を街路樹として植えたことを述べられ、『万葉集』の

東の市の植木の木垂るまで逢はず久しみるべ恋ひにけり

(巻三、三二〇)

の一首に詠まれる平城京東市（左京八坊三条）のあたりに植えられるにいた街路樹を柳と考えられ、上句はその柳が垂れ、地面に届くほどになっている様子を詠んだものとされている。もつともこれを杏（からもも）とする説が、古く関野貞氏によって提出されてもおり、『萬葉集全注』該当歌注に拠る）、確定は難しいが、しかし平城京に柳が植えられていたことは、

春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば都の大路し思ほゆ

(巻十九、四一四二)

という、「二日に、柳黛を攀ちて京師を思ふ歌一首」と題する歌によっても明らかである。都の大路には柳が植栽され、都城

の象徴的な存在として人々に認識されていたのであった。

さらにこの街路樹としての柳は、平安京遷都以後も受け継がれた。たとえば催馬楽の「大路」には、

大路に沿ひてのぼれる 青柳が花や 青柳が花や  
なひを見れば 今さかりなりや 今さかりなりや

と歌われ、また「浅緑」にも、

浅緑 濃い纏 染めかけたりとも 見るまでに 玉光る 下  
光る 新京朱雀のしだり柳 (以下略)

とも歌われている。平安京も朱雀大路を中心として、柳を街路樹として植栽し、街並を形成していたらしい。従って「古今集」に収める、

見たせば柳桜をこきまぜて都ぞ春のにしきなりける

(春上、五六)

という素性法師詠は、そうした平安京の春景を詠んだものと考えてよからう。『延喜式』の(卷四十二、左右京職)には、

凡神泉苑廻地十町内、令京職栽柳 町別七株

とあって、神泉苑の周囲にも約一五メートルに一本の割合で柳が植えられ、また

凡道路辺樹、當司當家栽之

とあることからすれば、阿部氏も指摘される如く、植樹は道路に面した役所や家々の費用負担で植えられたものと思われる。

ところで平城京や平安京の街路樹として、なぜ柳が選定されたのかは明らかでない。阿部氏は唐の長安の都で、槐と柳(楊)を植えたのに倣ったものかと推測されている。長安の柳については、石田幹之助氏の卓論「長安の春」に、中国では春秋、戦

国以降、街路樹を植えることが発達し、槐樹と楊柳を本格とした旨が述べられている。楊柳については、韋応物の「擬古詩」十二首中の第二に、「京城繁華地、軒蓋凌晨出、垂柳十二衢、隱映金張室……」とあることや、同じく「陪元侍御春遊」の詩に「何処醉春風、長安西復東、……往來楊柳陌、猶避昔年駮」とあることなどを根拠とされているが、その時代性を顧れば、我国の柳の植栽が唐風の模倣であった可能性は高いと言わべきであろう。

一方柳は、都城の街路樹として植えられただけではなかった。それは都鄙を結ぶ街道筋にも植えられたらしい。平安中期の歌人源兼澄の家集「兼澄集」(六六)には、

若狭の国に侍りし時、なる人の来たりしかば逃げて京へ上りにしかば、追ひてまかるに柳の本にて

君がかく来るにつけても青柳の糸はとくべくたえじとぞ思ふという一首が見える。詞書の「なる人」は、春秋会「源兼澄集全釈」(風間書房、平成三年)が指摘される如く、「ある人」(又は「京なる人」)の誤写でもあろうか。ともかく夫婦喧嘩の末に、夫が妻を追いかけて、柳の木の下で妻に歌を詠みかけたのである。こうした街道筋に植えられた柳は、『大式高遠集』中の彰子入内屏風和歌、

柳ある所

うちなびき春立ちにけり青柳のかげふむ道に人のやすらふという一首(これは大路の柳と見るべきか)や、また後代の作品ながら、宝治二年(一一四八)に詠進された「宝治百首」の春部に、「行路柳」題が設けられ、

道の辺に染めてみだるる青柳のかみなび山を今日や越えなん  
(二四八、基家)

うちなびき行手のかたやをしふらん道のさかひの青柳の糸

(三〇五、寂西)

などの歌が詠まれていることによっても明らかであろう。柳は都鄙を問わず、道沿いに植えられて街路樹としての役を担ったのであった。

※

さて柳は、街路樹以外の目的においても、様々な場所で植えられたらしい。道路に面した邸や役所も、多くの柳の木を擁して建築、構成されたようだ。鑑賞用に植えられた庭の柳もその一つである。たとえば『忠見集』には、

わが宿の柳の糸も春来ればみどりの糸なりにけるかな

(八三三)

の一首が存し、詞書に「三月、柳おほかる人の家」と見えている。月次屏風の絵柄に、「柳おほかる人の家」が描かれていたことは、平安時代初期、すでに柳が人家に多く植栽されていたことを証している。また『和泉式部集』は、冒頭の百首歌の春歌の中に、

見にと来る人だにもなし我が宿のはひりの柳下払へども

(二六)

という一首を収め、「はひりの柳」を詠んでいる。「はひり」は、邸の入口、或いは門から家までの間を意味する語だが、その辺

りに柳が植えられていたのである。柳の下枝を切り払って客を待つ用意はしたものの、誰も訪れてくれない恨みの気持ちを詠んでいる。或いはまた藤原定家も、その日記『明月記』のこかしこに、たとえば

垂柳漸緑 (寛喜二年へ二二三〇) 閏正月二十四日)

卷二南面簾 一對紅梅翠柳 (寛喜三年二月二十一日)

雨中对花柳 悲残涯 (同年二月二十五日)

等の記事を書き留め、庭の柳を注視してその柳によって自らの心を慰藉しようだ。

また同じ庭で言えば、柳は禁中の庭にも植えられていた。

春来れば玉の砌を払ひけり柳の糸も伴のみやつこ

(長秋詠藻、二二二)

の一首は、保元四年(一一五九)三月内裏歌会での、「禁庭柳垂」の歌題のもとに詠まれた藤原俊成の作だが、これによって禁中の庭の柳が確認される。『荣花物語』(卷三十三、きるはわびしとなげく女房)には、

女院の御堂行はせ給けるに、柳の作りたるを内に参らせ給

へりければ、枝はまことにてありければ、清涼殿の壺に植へ

させ給へりけるが、生ひ出でたりけるを聞き給ひて、――

(以下略)

と記されており、清涼殿の庭の柳の痕跡が認められもするのである。

さて柳は、庭内の中でもとくに門の辺りに植えられたようだ。

右の和泉式部の「はひりの柳」もその一つであろうが、古く『万葉集』に、

我が門の五本柳いつもいつも母が恋すす業りましつつも

(巻二十、四三八六)

の一首が見られ、門前の柳が詠まれている。「我が門の五本柳」は、この歌から派生して後代にいくつか詠まれるに至るが、漢語に「門柳」という語があり、たとえば白居易の「東南行」

(白氏文集、卷十六、〇九〇八)に

春色辞門柳

秋声到井梧

などと詠まれていることからすれば、街路樹と同様に門前の柳は中国の様式や文学からの影響と考えてもよからうか。

ところでこの門に植えられた柳から推知されるように、柳は境界を形成する場所に植えられることが多かつたらしい。家屋敷の周囲では、門の他に垣根としても、柳はその役割を担っている。たとえば、

山里の家ゐは霞こめたれどかきねの柳すゑ葉とに見ゆ

(拾遺集、雑春、一〇三二、弓削嘉言)

春雨の降りそめしよりいつしかと垣根の柳色づきにけり

(永承六年(一〇五二) 六条齋院歌合、二二六、讃岐)

などに見える「垣根の柳」がそれをよく示すが、或いはこれもまた漢語「牆柳」に基づいての、中国様式からの影響であろうか。「牆柳」は、たとえば『和漢朗詠集』(柳、一〇二二)に、

林鶯何処吟「箏柱」

牆柳誰家曝「麴塵」

という白居易の「天宮閣早春」の一節が撰入され、早くに我國の詩人や歌人たちに親しまれた。右の弓削嘉言詠なども、この

詩句の影響下に成ったものであろう。

さらにまた柳は、家屋敷の境界にだけ植えられたのではなかつた。

しづのめが小田の堤にさす柳しげくも今年はえにけるかな

(久安百首、七一、実清)

小田の岸の柳もうちはへてひくしめなほにかけぞあらそふ

(隆祐集、八四、田辺柳)

などの例からすれば、柳は田のきわにも植えられ、その境界を形造っていたらしい。そしてそのことは、古島敏雄氏(『土地に刻まれた歴史』、岩波書店、一九六七)が、江戸時代に越後の旧潟頭村で、田を細分化する際、仮畦を作らずに柳の若枝を挿して区分したことを報告していることから首肯される。柳の若枝を挿したのは、おそらく『万葉集』(卷十三、三三二四)の長歌の一節に、

くみ雪降る 冬の朝は さし柳 根張り梓を 大御手に 取

らし給ひて

と詠まれる如く、柳が古くから挿木で根づきやすいことを知っていたからであろう。柳を挿木にする歌は、右の「久安百首」の実清詠にも見られるが、他にも『万葉集』に重ねて、

小山田の池の堤にさす柳なりもならずも汝と二人はも

(卷十四、三四九二)

と見えている。また柳は、同じく『万葉集』に、

柳こそ伐れば生えずれ世の人の恋に死なむをいかにせよとて

(卷十四、三四九二)

とも詠まれる如く、根張りや芽ぶきにおいて、きわめて生長力

の強い木であった。

そして田ばかりではなかった。柳が野の境界に植えられて実用性を有していたことを、『留守家文書』の「岩城分七町荒野絵図」を用いて、久保田淳氏が指摘されている。〔空仁・惟方・西行〕、平成七年六月和歌文学会例会。西行の「山がつのかた岡かけてしむる野の境にたてる玉のを柳」（西行法師家集、三六）は、それを詠んだ一首である。

※

さてこうした柳の生活上の意義に照らし合わせる時、『万葉集』の次の一首も相應に興味深い問題を孕んでいる。

山のまに雪は降りつつしかすがにこの川柳は萌えにけるかも

（巻十、一八四八）

の一首で、ここには川柳の語が見える。これはまた、並んで配列される、

山のまの雪は消ざるをみなぎらふ川のそひには萌えにけるかも  
（巻十、一八四九）

という一首の「川のそひ」の柳や（歌中に柳は省略されているが）、『日本書紀』中の、

いなむしろ川ぞひ柳水行けばなびきおきたちその根は失せず  
（顕宗天皇紀）

という一首の「川ぞひ柳」と同一のものと考えてさしつかえな  
いであろう。川の堤や岸に植えられた柳と考えてよく、じじつ  
『万葉集』の中には、あちらこちらの河岸の柳がいくつつか詠ま

れている。たとえば、

あられ降り遠江の吾跡川柳刈れどもまたも生ふといふ吾跡川  
柳  
（巻七、一一九三）

の吾跡川（未詳、近江国安曇川に関わるか）の他、佐保川（奈良市、四三三）、六田川（奈良県吉野町、一七二三）などがその例として挙げられる。そして川ばかりではなかった。既掲の三四九二番歌「小山田の池の堤」に見られる如く、池の堤にも柳は植えられたのであった。そしてこうした川や池の堤への柳の植栽は、実は法律の定めるところでもあった。『標注令義解校本』（巻七 宮繕令第二十）には、

凡堤内外并堤上、多植榆柳雜樹充堰用

とあって、『養老令』に、堤には榆や柳を植えるべき旨が記されているのである。柳は、いわば法制下において、池や川の堤に植栽されたのであった。

さてこうした川や池の堤の柳は、平安時代以後の作品の中にも少なからず登場する。いくつつかの例を挙げるならば、たとえば『後拾遺集』（夏、二二〇）の、

夏衣たつた川原の柳かげ涼みに来つゝならず頃かな

という好忠詠中の竜田川ぞいの柳や、

道のべの賀茂の川原の柳かげ春のゆききにたれならすらん  
（夫木抄、春三、八三一、従二位頼氏卿）

などの賀茂川原の柳や、

広沢の池の堤の柳かげみどりも深く春雨ぞ降る

（風雅集、春中、九九、前大納言為家）  
など、広沢の池の堤の柳も詠まれている。また『散木奇歌集』

(五三九)の詞書に「田上にて川のほとりに立ちなみたる柳の木」とあるのもその一例であろう。一方こうした岸の柳は、その風景が一般化するにつれて歌題化を促し、『伊勢大輔集』(一九)には東三条第の池の柳を詠んだ「岸柳」が見え、『橘為仲集』(六五)には、宇治殿での「岸柳垂糸」題が存する。また『津守国基集』(八)には「岸柳臨水」題が見え、治暦三年(一〇六七)三月十五日「備中守定綱歌合」では、「岸柳」が設題されてもいる。従っておおむね後拾遺期頃から、――それは奇しくも好忠の竜田川原の柳詠が『後拾遺集』に入集するのとほぼ時を接するのだが――、「岸柳」題が固定化し始めると見てよいであろう。

さて以上のような岸や堤の柳は、既述の如き根張りの良さから見て、それが護岸のために植えられたのであったことは明らかであろう。柳田国男が『山の人生』の中で、「川の岸にあるカハヤナギの類の、髻根の極めて多い樹木を抜いて来て、其根をよく水で洗ひ、それを寄せ集めて蒲団の代りにしたさうである」と述べている如く、柳は髻根の発達した樹木で、護岸にはきわめて適していたのであった。

ところで柳の護岸の用途について、それを具体的かつ詳細に記したものと、江戸時代の農学書『百姓伝記』がある。他に江戸時代の博物学書『成形図説』にもその旨は記されているが、前者の方がより詳密である。そこでいま、『百姓伝記』に拠ってこれを引けば、同書の巻七(防水集・川除堤に柳・竹を植る事)に、

水をふせぐ川よけには、堤に柳を植るにましたる事なし。然

ども柳に色々有故、兼て見習、覚べし。川柳と云て、枝の多き、木たけの延ぬ、葉のほそき柳あり。堤を水つきより堤腹に、ひしと植置。秋の末に枝を中かりにして、わかばえを出さず。年々からざれば、木ふとり、大水の時、しやんとたちて居るによりて、水あたりつよくして、却て水さかまき、堤腹の土を洗ふ事多し。年々かりては、枝ほそくやわらかにして、大水の時、堤腹へ柳の枝ひたとぬるによりて、土をあらはず。かり取に伝受あるべし。丸葉柳・楊柳・こぶ柳、せいひの延上らぬ柳を水岸にさせば、順々に根はへまとい、土をつゝみ、堤腹くづれず。また新堤をつくに、そだに切ませ、堤につき込ば、わかばえ出る。極月より二月までさしたるがよし。(以下略)

と述べられている。以下に挿木の方法や大木になる柳などは植えるべきではない旨が述べられるのだが、これに拠れば柳は、水漬(通常水位)より堤腹(水面から堤頂の間、川側の法面)に植えられており、堤の上に植えられたものではなかった。すなわち堤の川側の斜面に植えられたわけで(柳は無酸素に耐えられず、水中や土中深くに根を伸ばせないため、水漬きより上に植えるという)、書紀の「水行けばなびきおきたち」という表現などは、柳の枝葉が水面に漬かるように植えられていたことを示しているものと見られる。そしてそれは、右の『百姓伝記』に言う如く、「大水の時堤腹へ柳の枝ひたとぬるによりて土を洗はず」という効用を狙ったものである。『夫木抄』(春三、八七二、光後朝臣)の、

瀬を早み水かさまされば玉川の川ぞひ柳枝ぞ流るる

の一首は、まさにその光景を写し取ったものであろうし、また『風雅集』（春中、一〇〇、法印定円）の、

吉野川いは浪あらふふし柳はやくぞ春の色は見えける  
の一首中に見られる「ふし柳」は、堤腹に川に向けて横ざまに  
植えられた柳を指しているものと思われる。

ところで柳の歌と言えば、誰しもすぐに『新古今集』（夏、  
二六二）に入集する西行法師の、

道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ  
の一首を想起しよう。この柳は、のちに、謡曲「遊行柳」を  
経由して、蘆野の里の田の畔に残る柳として『奥の細道』に伝承  
され、「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」の一句を芭蕉に詠まし  
めるのだが、しかしこの西行の歌においても、やはり一本の柳  
の太木を想像すべきではないのではあるまいか。「遊行柳」で  
は川岸の一本の柳の老太木が示され、また現今芦野温泉神社  
（栃木県那須町芦野）参道入口の田園地帯に、二本の柳の太木  
が遊行柳として伝承されるが、いかがなものであろうか。この  
柳も、道の辺の清水が増水時に道の土をそぎ落とさないように  
と植えられた、護岸の柳並木の中の本で、低木と考えた方が  
実情に合うように思われる。実際低木種のイヌコリヤナギなど  
は小川のふちなどに生えるという（原色牧野植物大図鑑）。もつ  
とも低木では樹蔭納涼にふさわしくないというのであれば、亜  
高木のカワヤナギなどを考えればよからうか。亜高木のもので  
も、幹を途中で伐れば護岸の役に立つとされる。

そしてこうした河岸の柳は、近代に入ってもなおその風景を  
形造っていたと思われる。その顕著な例としては、歌集「一握

の砂』（明治四三年）に初出する石川啄木の代表的な望郷歌、

やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに  
の一首を挙げれば事足りようか。ここには岩手県玉山村浜民の  
地を流れる北上川の岸辺の柳が描き出されているが、おそらく  
それはつい最近まで、全国各地に共通の景観として見られたも  
のであったのだろう。しかしそれについては、別途に考察を加  
えねばならない。

いづれにしても私たちが思い描く古典文学の自然風景の中に  
は、今以上に想像を越えてあちらこちらに柳が点在していたと  
考えてよきそうである。柳は日常の風景の中に、馴染み深くそ  
の存在を誇り、また先人たちの生活の用に立っていたのであった。

（付記）本稿をなすにあたり、伊藤貞彦氏の御教示を得た。感  
謝申し上げる。（かわむら てるお）